

コロロメソッドに於ける自閉症児の発語プログラム

○久保田小枝子 寺田雅英 金子尚弘
(コロロETセンター) (慶應義塾大学) (白梅学園短期大学)

言葉の獲得に於いて模倣は重要な行動である。自閉症児や重度児など、とりわけ対人関係が取りにくく、模倣ができない子供は、言葉の遅れが目立ち、年齢に達しても発語しない子供も多い。コロロメソッドでは、こうした発語のない子供を対象に文字を用いた治療プログラムを組み、週1回90分から120分の訓練と親への指導によって自発語を引き出している。今回はこのプログラムの中でマッチング課題と模倣課題を取り上げ、自発語が出現するまでの過程を分析した。

<方法>

〔被験児〕自閉症の男児3名と女児1名。入所時、Y.A.は5歳11ヵ月、R.N.は5歳3ヵ月、U.S.は7歳4ヵ月、E.Y. (女児)は9歳10ヵ月であった。

〔マッチング課題と模倣課題の手続き〕

1. マッチング課題

マッチング課題では、教材(刺激セット)として絵カード、文字カード、実物、音声刺激を用い、子供の反応(反応セット)として書字と発語を用いて、これらの対応関係を見本合わせ手続きを使って次の順序で訓練した。

(1) 同一なカードの対応関係…20組

絵カードと絵カード→図形カードと図形カード→文字カードと文字カードの順序で進む。絵を初めから分類出来る場合でも「対」に置くという手続きを理解できないことが多い。模様などの単純な絵カードから始め、絵と絵を合わせて置く動作がプロンプトなしに、カードに注視して5枚続けて置けるようになるまで訓練する。次に、図形と図形の対応関係に移り、できるだけ早いうちに文字カードの対応関係へ移行する。

(2) 絵カードと実物、絵カードと文字カードの対応関係…20組

一つの絵に対し常に同じ文字(字記号)を置くよう訓練する。プロンプトを用いて、誤反応が起きないようにする。

(3) 文字カードと書字の対応関係…10組

文字らしい図形が10個書ければ良い。書字は、初めから出来るわけではなく、後述する模倣課題に於ける模倣の訓練の結果である。

(4) 絵カードと書字の対応関係…30組

絵カードと書字の対応関係を練習していくと30枚書けた頃から新しい絵カードに対しても文字がスムーズに書けるようになる。おそらく、一字一音の対応関係の発見があるのではないと思われる。更に、絵本の絵や実物

を絵カードの代わりとして用いる。

(5) 音声刺激と絵カード、音声刺激と文字カードの対応関係…10組、更に、音声刺激と書字、音声刺激と発声の対応関係

ここで初めて音声刺激を用いる。最初は絵や文字を手掛かり刺激として用い、徐々に音声刺激だけにする。

(6) 絵カードと発語、文字カードと発語の対応関係…10～20組

発声できる音の組み合わせ、子供が良く知っている、使用頻度が高い、という条件を満たす絵カードを選ぶ。最初は音声刺激に絵カードや文字カードを重ね合わせ、オーム返しのパターンにならないよう音声刺激を次第にフェイドアウトさせていく。

(7) 実物と発語の対応関係

(6)の訓練で確実にになった発語を日常生活のいろいろな場面で実物に対して練習する。

(8) 自発的発語

学習場面以外でも発語し、また、(7)で実物との対応を訓練していない発語も行おうようになる。

2. 模倣課題

(1) 動作(感応)模倣…1拍子の線「|—○」

子供の感応行動を活用し、手本動作と同時に手を動かすことによって線を描かせる。初めは手本と同じ線を書くことが分からなくて良い。

(2) 定位模倣…2拍子～3拍子の線

徐々に手本動作刺激を減らし、あらかじめ紙に書かれた線を見せただけで同じ線を書けるようにさせ、ひらがなの模倣に移行する。マッチング課題の(1)と(2)へ移行した初期は、手本の動作が残像のように見えているのではないと思われる。また、文字は正確なものではなくて良い。

(3) 音声模倣

口形模倣→音声模倣→言葉の模倣と訓練する。子供がすでに発声している音(奇声でも)を利用する。経験的にマッチング課題の(4)で30枚書ける頃音声模倣の訓練を始める。

3. マッチング課題と模倣課題の組み合わせと順序

このプログラムに於いては、課題の順序と組み合わせが極めて重要である。まず、(1)模倣課題は、模倣を形成する訓練としてではなく、むしろマッチング課題遂行のための手段としての位置づけを持つ。模倣課題の動作模倣と定位模倣はマッチング課題の書字を形成するため

に、音声模倣は音声刺激と発声の対応関係や絵カードと発語の対応関係を訓練するためにそれぞれ行われている。

(2) 動作模写と定位模写を音声模倣以前に訓練する。模写では、模倣した結果作り出された刺激(線, 文字)に従って行動を統制しなくてはならない。「線」という刺激が音声刺激に比べて永続性があり、行動の統制をしやすくしていると思われる。こうした訓練の結果、音声模倣の訓練がしやすくなると考えられる。

(3) 書字の訓練を音声刺激導入以前に行う。書字は、文字を書く訓練であると共に、ひらがな文字の「一字一音」の特性を発見する訓練にもなっているように思われる。「いす」の「い」と、「すいか」の「い」が同一の文字であることを発見することによって、音と字を対応させる訓練が出来るようになる。音声刺激を文字の集まりとして聞き取ることにより言葉を聞き分けることが容易になり、また、音声模倣の訓練に於いては発音の矯正がしやすくなる。

<結果>

マッチング課題と模倣課題を組み合わせ、4名の被験児

に訓練した結果が図1である。課題の訓練期間と課題間の移行時期を図に示した。Y.A.は、コロロに於ける標準的な傾向を示し、順調に課題が進行した。R.N.は、書字で比較的順調に進んだが、音声模倣での訓練が長くなった。発音できる音がなかなか増えず、現在でも発音出来ない音が50音中10音ある。U.S.は、絵と文字の対応関係、特に、書字の訓練に時間がかかり、更に、こだわりが強く、新しい課題への移行が難しかった。E.Y.は、入所時点でひらがながをほぼ書くことが出来たため、早い段階で音声模倣を行った。

<考察>

コロロメソッドの発語プログラムは、マッチング課題と模倣課題を組み合わせること、音声模倣の訓練以前に模写と書字を導入することに特徴がある。しかし、それぞれの課題への移行が遅れると、自閉児特有の「こだわり」によって課題の変更には強い抵抗を示すことがあり、この点は注意を要する。

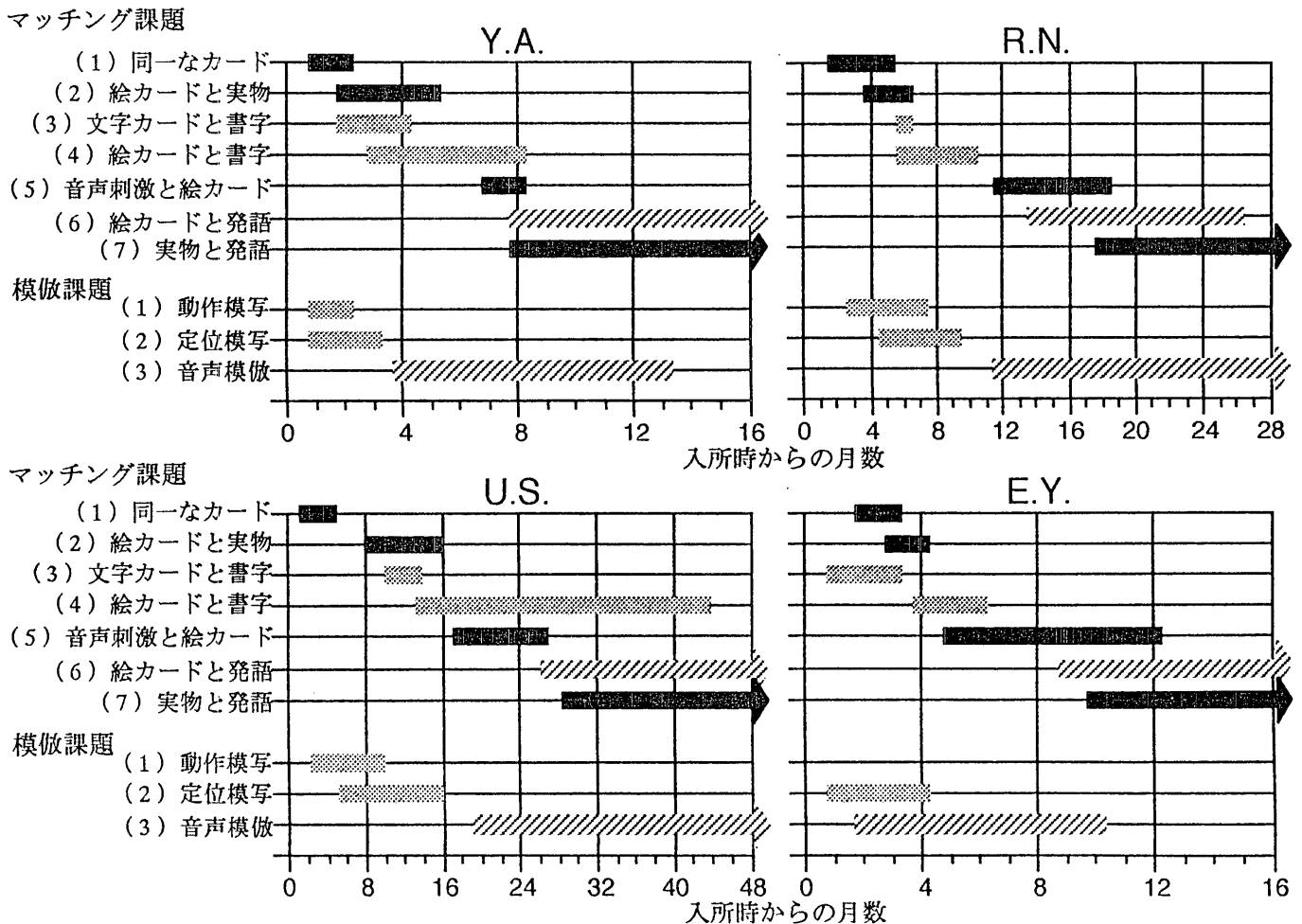


図1. 4名の被験児に於けるそれぞれの課題の訓練期間と移行時期